



はじめに

中川辰っあんは、昭和20年生まれで75歳、耳が大分遠い。長いこと耳元でライフルをぶっ放して来たのが原因らしい。「わしは猟師で鹿とか猪の命をいただいている、美味しくいただき一切れも無駄には出来ん」が口癖だ。

仲間と猟舎館と名付けたジビエ肉加工所を営み、鹿肉、猪肉を古くからのマタギの言い伝えを生かし「サイカチ」「タラの木」の薬木で燻した山の恵みの燻製を作っている。

辰っあんは、マタギの伝統を保持する伊吹山地最後の現役狩猟者で里山のスナイパーだ！辰っあんから聞いたマタギのエピソードをまとめてみた。

マタギの師匠

わしがマタギの手習いを受けたのは40年以上前や。四国から来て県営林とか国有林で枝打ちとか間伐を生業としていた小松さんという人や、この人は7、8年前亡くなったわ。全国の山を仕事場にしていた、こっちの方では北山とか京都の山。

雪が降ったら山の仕事はできないので、猟師もしていた。

山の関係者から、「すみません、小松ちゃん! 今年も熊15頭位獲ってくださいな」との依頼が来る、熊は大事な杉の木の皮を剥いで木を枯らしてしまうからな。そうすると二人の弟子を連れて毎日鉄砲担いで熊獲りするような人やったわ。その人に師事し話を聞いていろいろ教えてもらったわ。

小松っあんの名人技

小松っあんは長い狩猟の経験から猪の習性を実によく知っていた。猪は大体1年半くらいで親から離れる。その時には大体40kgになる。猪は親から離れるまで親といつも一緒や。ウリボウと呼ばれる間は、片時も離れず後をついてるんや。

山の中の獣道を移動する時、他の場所からよく見えるような見通しの良い所に来ると、一度止まって警戒する。その時子供のイノシシが親に追いつくように来て一列に並ぶことがある。その動きを小松っあんは知っているから山の斜面に向かっての射撃地点を選び身を潜めて「早こい、早こい…」と待っていて4匹が並んだのを狙いすましてパーンとライフルで撃った。2つは倒れて、1つは手負いで、1つは当たらなかった。ライフルの弾一発で3匹獲った。ゴルゴ13みたいやろ。名人やったわ。

髪の毛が逆立った

狩りを始めたてのころ、いつものようにのんびり山ぎわの野原にトラックを止めてトラックの荷台に座っていた。猪が谷川の近くの岩の下でジツとしているのを見つけた若いハンターがパカーンと撃った、「命中や当たった。」と喜んで。「やったなあ言うて。」トラックから離れて斜面で銃を構えていた。小さな谷川で手負いのまま向かいの山に逃げるのかと思って銃を構えてると、一旦は向こうに行きよったが川を渡ろうとして止まりよった。イノシシの頭と首が良く見えたのでパーンと撃ったが当たらず、そうすると猪がくるっとこっち向いて、突進して来たんや。距離は50~60mや、なだらかな斜面をパパパッと来た、パーンとまた撃った、また外れや、パーンまた撃った3発目の引き金を引いたら、もうそこやった。フーフーフー荒い鼻息させて途中からわしのほうにもろに向かって来た。こりゃあかんと思って必死に上に5~6m逃げて4発目をパーン、当たったイノシシはゴロンゴロンと倒れたがな。その時は帽子を被っとなんだ髪の毛が逆立ったことを覚えてるわ。最初に撃った若いのが「どや~倒れたか？血のり引いてるやろ。」と自慢げに言うて寄ってきたけど、血のりなんかあらへんがな、弾が足を少しかすってるだけや、猪にしたら無傷と一緒にや。「おいおいこれが血のりかいな、お蔭でほんまに危なかった。」と文句言いたかったけど、こっちも3発外して4発目やから強くも言えんかった。

巻狩り

巻狩りは古来より連続と続いている狩りの方法や、昔は村々の字単位で鉄砲を持つ何人かと村の若者達が勢子になり、ワアワア言いながら山を囲んで獣を追い立てていたんや。今も昔も狩猟者が巻狩りで最初にやる事は、見切りと言ってリーダーが狙いを付けた山の谷に静かに入って獣の足跡を探し注意深く観察する。この谷には3頭の足跡があり、2頭は外に出ている、1頭は残っているなどと予想をつけて、山を囲んでいくのや。師匠の小松っあんは、山中を歩いて足跡とか痕跡を追って獣を見つける遭遇戦も得意やったけど、基本は仲間数人との巻狩りやった。師匠にいろいろな巻狩りの技を伝授され継承してる。わしらの巻狩りは5~6人で犬を出して獲物を追い出す。追い出すのを勢子(セコ)、追い立てられた獲物を狙い撃ちする射手をマチというんや。マチは獲物の逃走ルートを予測して、身を潜め音を立てずタバコもすわんとじっと待っているんや。勢子も身を守るため銃を持って行く、出てきたら撃つが、誤射とか暴発には気を使う。猟場に5匹おったら3匹は勢子が打ってしまうな。山の中で犬が匂いを嗅いでこっちの方やと感じてソワソワとした動きを始める、そこで始めて犬を放す、犬はサッサッサと斜面を上がっていく、または谷筋をおりてくる。そこでワンワンワンというたら、鹿とか猪が追い込まれて逃げ道をふさいだ合図や合図や、そこぞにハンターが着いてパーンでおしまいや。お互いの合図とか連絡はトランシーバーや、40年前初任給が15,000円位のとき3,000円位してた。高かったわ。今は犬に付けたGPSが獲物が逃げる場所を刻々と表示してくれる。抜群の威力を発揮してるな。宇宙の衛星を利用した狩猟の時代やから、そら獲れるわな。

1に歩き、2に犬、3に鉄砲

昔から猟師は、一に歩き、二に犬、三に鉄砲イコール腕やな。犬は自分で育てる。当時外国製の鉄砲は80万~100万円位してたわ。鉄砲の当たる当たらんは腕次第やな。上手な奴も下手くそもおる。下手なやつはいつまでも下手やな。そやけど、山は歩かな猟は出来ません。いい犬がいないと獲物は取れません。巻狩りで急所を外しても、血が出て手負いになったら、わしらのもんやな、犬が違ふもん、パーンと音がしたらどこにおろうかが何しようが、鉄砲のところにビューと集まってくる。それから獲物をしとめるまでどこまでも血の跡を追跡してしとめる。1シーズンに猪は大体3~4頭しか獲れん。うちのグループ全体で30~40頭、最近は少なくなった。去年は6頭、その前は17頭やった。豚熱(トンコレラ)が原因や、去年は山で病気で死んだ猪を18頭確認したわ。グループは10人おるけど、いつも一緒に猟をするのは5人のメンバーや、「猟夢滋岐会」と名付けてる。熊は対象外やけど、不意に出会って威嚇で撃つことはある。わしは犬を7匹飼っているけど、1匹しか熊には向

かっていかん、残りはいかんで。そいつ以外はワンとも言わん、熊の巣穴の近くにいったらどっかに行ってしまうわ。

熊に向かっていくのは、四国犬、シシクイ犬とか気性の激しい犬種や。甲斐犬も行きよる。シシクイの犬が一番良かったなあ。

この辺りの猪と鹿

こちら辺の猪は四種類いるんや。アカジシ、ホオジロ、普通の猪、最近出て来た猪豚や。

アカジシは一寸小さくて小ぶり、大きくはならんし、気性が激しい、肉は断然一番美味しい。ホオジロは頬が白いし気性も強いわ。

鹿にしても里山の鹿と伊吹の高い山に住む鹿は図体が全然違う、肉はええもん食っているのでも里山の方が美味しいなあ。

里山の鹿でも肉から見ると、ピンクと赤いのと、そして赤黒いのと三種類ある。わしが薬木で燻製作っているのは赤黒や。一番美味しいわ。

秋から冬にかけての雄鹿は、他の雄と角を振り回して、けんかしてメスを取り合って争うため普通の首の倍くらい筋肉が太くなっている。脂肪の部分も堅く固まる、

猪も同じで背ロースの上、肩ロースのところは、特に脂肪が固くなってナイフを突き立てても半分も入らん。これを鎧(よろい)がかかると言っている、これが美味しいわ。鉄砲の弾、散弾の一発玉も入らん、ライフルの弾丸は入る。

猪 豚

猪豚やけど、こちら辺の猪豚は、昔牧場で牛を飼い、豚を飼っていた。豚をイノシシとかけて猪豚にしてたけどそれが逃げたという噂や。

多和田の山の中で狩しているとき、ブーブー、ブーブー、ブーブーと鼻を鳴らしているのが3頭並んで歩いていた。なんや豚かいなと思ったわ。

猪と豚の姿形とか性質の違いは遺伝的なものかDNAか？どっちが強いかで違ってくるような。

150kgくらいの大きな個体になるのは豚の遺伝が大きいし、猪豚の肉は固くなくて美味しい。そやけど猪独特の脂の甘みはない、猪豚の脂は柔らかくさばいてもボタボタと落ちる。猪は100kgあってもせいぜい油(脂肪)は3cmくらいやな。

山のオヤジ

長いこと猪を追っていると、びっくりするような大物に出会う事がある。伊吹山西の七尾山にはわしらが「山のオヤジ」と呼んでいる、びっくりするほど大きくて黒い猪がおる。

何年か一回くらいしか姿を見ることはなかったが、仲間の勝ちちゃんと組んで猟をしていた時や。勝ちちゃんはわしと同年代、とある大きな商社勤めをしていたが、狩猟が何より面白くて商社を辞めた人や。勝ちちゃんが山の中の急勾配の崖場で、真っ黒で熊かと思まがうばかりの伝説の大猪「山のおやじ」を見つけた。

もっと良く見ようと高い崖の中段の少し出っばった場所に移動したところ、目の前に「山のオヤジ」が現れて、まるでクマのようなウオーウオーとうなり声を上げて向かって来た、体当たりされて牙でやられると思って身構えて3m位前に来たとき思い切り上に跳んだ後、足を踏み外して7m位下の地面に落ちて気を失った。

しばらくして意識が戻り周囲を見ると、「山のおやじ」も一緒に落ちて動きを止めている。勝ちちゃんは、手放した銃を探すと10m位先に落ちていたので、腹ばいでそおと取りに行くと、銃を向けると「山のオヤジ」は一足先に姿を消していたという事や。「山のおやじ」は、わしらだけでなく、米原市、長浜市、岐阜県の5つのグループが追っていたが、ついで仕留めたとはいってないなあ。まだ、深い山のどこかに居るわ。

七尾の「山のおやじ」は黒かったけど、伊吹山には白い猪がおるといふ伝説がある。遺伝的な可能性もあるけど、わしは伊吹山が石灰石の山で、白い泥のヌタ場でヌタうって、乾いたら毛皮が白くなるから白い猪になったと思うわ。

山の恵みをいただく

グループの巻狩りは、「は～い終了！」「マチ解除！」とトランシーバーがコールしたら終わり。こっちには二つおるぞ～と言うたらその場所にみんな走って集まってくる。

撃った人は既に血抜きを始めてるわ。ナイフを頸動脈に刺しての血抜きや。山の斜面に頭を下にして置いて腹を押すのや。放血言うて血を早く抜かないと血が肉に回って肉質が落ちる。

肉はメンバー全員で分ける。マタギ勘定やな。犬も分け前にありつける。

腹割って内臓を取り出す、猪は小腸が断然美味しい。小腸のホルモンなんか、抜群よ。あれをな、煮込んで食ったら他は食えんで。

あとは心臓を取って残りは犬とか小動物の餌になるな。腸だけ出して雪があつたら雪を腹の中に詰めて急激に冷やすんや。雪やとガガガと下がる。毛皮を加工するのは難しいし市場がないからやりません。

肉の値段は、昔やけど腹抜きして大きい奴やと60kgとして、大体1kg2500円、売ると15万円くらいになったわ。わしが獲った中で一番でかいのは猪では150kgやった、これは4人でもなかなか動かなかつた、猪豚がかかっていたけどな。

番外編

猟犬のしつけとトレーニング

猟犬は、昔は猟場で根気よく動く、良く鳴く、足が速いオスとメスを選んでかけて生ませた犬であることが一番とされていた。

今は、DNAというか血統が全てやと思う。猟犬はオスよりメスの方が根気がええわ。

犬は呼んだら必ず帰ってくるようにしつけるのが最初の一年間の課題や、二年目になったらようやく山に放す、最初はええ犬と組ませるバディ方式やな、そのときワンワンワンと獲物を一緒に追わずんやけど、血統のええ犬は三～四回くらいで覚える。

わしの犬の名前はあまり大きな声では言えんけど、青春時代の女性の名前の一字を付けてる、トモ、カズ、ユウとか呼んでるけど、ユウと名付けた犬がなぜか優秀で今のユウは三代目や。

猪の急所は喉元、ここに食らいつくけば牙の攻撃をかわせるしな。獲ったイノシシの首から上を持って動かして、喉に食いつき離さんような訓練もしたわ。

昔のマタギの人は獲ったら獲物の温かい血を手ですくってなめさせたり、捨てる腸の部分を与えたらしいけど、今わしらはそれはしない。なんでやと言うと生肉の味を覚えると猟で倒した獲物を先に食ってしまうんや。

そこで内臓とかを大鍋で野菜と煮込んだモノとドッグフードを半々にして食べさせてる。わしは犬の一番のごちそうはというか喜びは獲物を追う事そのものやと思うで。

この前、向かいの山で猪を見つけた犬2匹が、ワンワンワンと距離を置き、威嚇しながらぐるぐるの円を描いて対面して回って釘付けにしてたわ。ハンターが着いたらその方向に追い立ててバーンや。絵に描いたような連携プレーやね。

ええ犬は何物にも代えがたいな。

